

「共生社会」の実現に向けて、どんな道の方があり得るのか。

そもそも「共生社会」、「マイノリティ」、「マジョリティ」とは何なのか。

皆さんは考えたことがありますか？

今回のイベントではNHK主催の日本賞を受賞した「人種差別と戦った中学校の三週間」というドキュメンタリー映画からこれらの問いに対するヒントを得て様々なバックグラウンドを持ったゲストの方々にディスカッションをしていただきました。

映画の内容は、イギリスのグレンソーン高校の24人のクラスメイトが人種差別の撲滅を目的とした教育プログラムに参加する様子を撮影したドキュメンタリーでした。多様な人種の生徒がいるこ



の高校。24人のクラスメイトはほとんど「肌の色は気にしない」といった発言をしていましたが、プログラムの一環の実験により、24人中18人は無意識に白人をより好んでいたことがわかりました。「肌の色は気にしない、関係ない」といった「カラーブラインドネス」を助長する考え方でなく、肌の色を含めたそれぞれのアイデンティティを受け入れた上で、無意識な差別をなくすために、教育プログラムが実行されました。白人、黒人グループに分かれて自分のアイデンティティや人種差別について話し、その後全員で集まり本音で話し合ったり、差別の現状や現実を教える様々な科目

の授業を受講したりというものでした。それを経て生徒は漠然と感じていた恐怖や不安を少しずつ克服していき、お互いのアイデンティティを受け入れ、今まで見て見ぬ振りしてきた無意識な差別をなくす第一歩を踏み出していきました。

この映画を視聴後、本日ゲストとしてイベントに登壇してくださった、NHK 職員でセクシャルマイノリティの安田慎さん、スリランカのルーツを持つ上智大学生のビヤンビラ・キララさん、車椅子ユーザーの上智大学生の布廣幸太郎さんによるパネルディスカッションが行われました。

Q1 作品をご覧になってどう感じましたか？

布廣さん：この映画の大きなテーマの一つは「カラーブラインドネス」でした。私は、「障害や人種でなく、その人自身の人柄でみる」というのは違うとおもっています。障害の上で成り立った人柄もあるからで



す。例えば障害がなかったら、私は上智にきて社会福祉を学んでいません。なのでカラーブラインドネスをなくすこの映画のプログラムは良いとは思いますが、教員の考え方や質が大きな問題点となってくると思います。

ビャンピラさん：映画を観て、自分の過去の気持ちや葛藤を思い出し、映画の所々で泣きそうになりました。人はみな平等だと認識するのが良いこととされることは日本でも多いので、カラーブラインドネスは日本にも存在する問題だと思います。しかし、日本ではこの映画のような教育はできないと思います。有色人種や移民を合わせても人口の2%しかいないため、人種ごとにグループ分けをしてディスカッションとすることが不可能だからです。また、このような授業をしたとして根本にある共生社会の実現は本当に可能なかというところも疑問です。

安田さん：父親の仕事の関係で、幼少期ニューヨークに滞在したことがあり、マイノリティの子供として現地校に通っていたことがあるので、私も自分の過去の気持ちや葛藤を思い出し泣きそうになりました。NHKの人間として、11歳の小さな子達のバイアスを育ててしまったのはメディアの責任かもしれないと思っています。例えば「白人の女の子がかわいい」というような考えはメディアが偏見を植え付けていることが原因の一つだと思います。公共放送として多様な顔ぶれを映し出していくことがいかに重要なことか、改めて認識しました。

Q2「共生社会」に対して、もやもや、違和感、ジレンマを感じたことは？

安田さん：映画の中で「共生社会」は英語でなんと

言っているのだろうと思って聞いてみると、

Inclusive、または integrated society と言っていました

た。つまり共生社会は厳密にいうと、統合された、

寛容な社会という意味です。そんな社会は本当に存在するのか、幻想なのではないか

と疑問に思います。この映画が目指す人種的偏見がない社会イコール共生社会なのか

と問われると、そうではないと思います。他に払拭しなければいけない、子供たちが

意識していかなければ課題はたくさんあります。

一方で共生社会らしきものが見える場所もあります。ディズニーやマーベルの映画で

す。耳が聞こえないスーパーヒーローがいたり人種関係なく一致団結していたりす

る、アメリカハリウッドが描く共生世界がそこに描かれています。しかしこれもま

た、現実では実現できるのかというモヤモヤが生まれると思います。

ビャンピラさん：この映画のプログラムの中で生徒を人種別に分けてグループで話し

合い、自らのアイデンティティと立場を実感するという時間があり、黒人のグループ

は白人がいない場所で黒人としてのアイデンティティを自由に出し切って楽しむとい

うシーンがありました。ナレーター自身がこのプログラムは segregation（人種的



離)につながる危険性があるのではないかと感じていましたが、これこそが共生社会のジレンマだと思います。このようなプログラムや考え方を通して、「アイデンティティを尊重する」ことは、人種間の交流を断念し分断社会の促進に繋がる危険性があります。そういった意味での「共生」は、それぞれ分かれて、お互いを邪魔しないでおこうね、という意味に近いですが、私が思い描く共生社会はそうではないと感じています。

そして、このような問題が起こる原因はそれぞれが思い描く共生社会が違うからです。「自分の思い描く共生社会や平和や正義はどこかの誰かを傷つけるかもしれない」という認識を持つことが共生社会のアンビバレンスさやあやふやさを理解することだし、共生社会に向けた第一歩であると私は考えています。

布廣さん：安田さんが、共生社会は幻想かもしれないとおっしゃっていましたが、共生社会という幻想があるからこそ、これに近づけることは良いことだと思っています。日本で共生社会という言葉は浸透し



ていますが、この意味について考えている人は少ないと感じています。例えば、私の好きな食べ物はラーメンです。車椅子ユーザーに配慮し、最近あらゆる店舗にスロープが設けられ始めていて、ラーメン屋にも増えてきています。しかし、いざラ

ーメン屋に行くと、スロープが急すぎて、車椅子でのぼれない上に、いざ食べようと思っても、高いカウンターしかなくて食べられないということがありました。このような事態が起きるのは、やはり相手の立場になって、視点に立って考えられていない体と思います。日本の共生社会における課題点であり、ジレンマに繋がっていると感じています。

Q3 共生社会に対してどう向き合っていきますか？

ビャンビラさん：人は誰しも自分のマイノリティのアイデンティティに集中することが多く、マジョリティの部分に気づかないことが多いです。しかし、自分のマジョリティ性を理解することは相手のマイノリティ性を理解するために必要だと感じています。



例えば、私は今日日本在住のスリランカ人というマイノリティとして話していますが、同時に上智大学の大学生というマジョリティの一員だから今ここで話せています。ここで話す特権を持っていない、マイノリティとして意見を言えないマイノリティは他にたくさんいます。

この映像を見て、マイノリティ性だけでなく、マジョリティ性がいかに力強いもので、いかに責任のあることなのか考えていただきたいです。考え、実践してトライアンドエラーを繰り返して、共生社会を作っていくことが大切だと思います。

布廣さん：共生社会がどういうものかということについて考える人が一人でも増える社会になってほしいと思っています。このイベントに参加された方々は改めて「共生社会ってなんだろう」という疑問が生まれたと思います。いかに共生社会というものがぼやけたものであるか気づけた参加者の皆さんはマイノリティだと思います。マイノリティとして、このイベントを活かして気付きを提供できるきっかけ作りをできるようになることが大事だと考えています。私たちの一歩が、共生社会への一歩です。

安田さん：私は共生社会に対してどう向き合ってきたか個人的な経験と NHK としての取り組みについて言及させていただきたいと思います。

私は2019年に同性パートナーと海外で結婚し、職場にカミングアウトしました。しかし、同性パートナーの登録を会社的に認めないという制度があったので、全国の局向けに勉強会を開催し、その中でLGBTの施策について他の企業ではどういう取り組みをやっているか紹介しました。それまでは自分のセクシャリティについて周りに

言うことができなかつたため、遮断された気持ちでしたが、この行動をきっかけに職場の LGBTQ に関する施策が良い方向に向かっていったと感じています。

また、NHK のこれからの共生社会を目指す施策としては、採用面接の LGBTQ に関する Q&A の改善と、番組の出演者の多様性が挙げられます。以前は採用面接で LGBTQ の局員はいますかという質問に対して、プライバシーにふれることなので、お答えできませんと回答するように人事に指示されていました。私は隠すことでもないと感じたので回答の変更を提案し、今は LGBTQ の局員はいるという回答に変えられています。LGBTQ という言葉を日本で初めて番組で使ったのは NHK ですが、このように組織の中を見ると、まだまだ及んでいないことが多いです。

また、番組上では、男性と女性のジェンダーバランス 50/50 に近づける取り組みをしています。女性アナウンサーもまるで添え物のような存在ではなく、男性アナウンサーや司会者と平等な立場で番組進行をしたり、ドラマの主要なキャラに男女が何人いるか、数えることから始めています。このように子供達が目に触れる人物がより多様であるための試みは、あらゆる番組で進められています。

男女比だけでなく、障害者の方々が「おはよう日本」キャスターとして出演できるような、多様な人々が画面に出てくる環境づくりがこれからも必要だと考えています。



最後にモデレーターの総合人間科学部社会学科教授・ダイバーシティ推進室長補佐の田淵六郎教授からコメントをいただきました。

田淵教授：御三方の話を伺って、未来に対する希望と道標を頂けた感じています。大学の中で四谷キャンパスの中で、少しでも共生やダイバーシティに関する対話が進んでいくことが大事です。ひとりひとりが自分の歩みとして行動をしていくことをしないと社会って変わっていかないんだなということを改めて三人の話から認識しました。

また、今回のイベントを企画した上智大学生の桐原明香さん、大谷里歩さんからイベントを企画した背景と、イベントの意義についてお話しいただきました。



桐原さん：私は聴覚障害者で、パラリンピックボランティアなど障害に関わる取り組みを行ってきました。初対面の方に障害なんて関係ない、それより人柄だよ、と言われてきたことがあり、気を遣っていただけたのかもしれないが、自分のマイノリティ、障

害の部分が切り捨てられていると感じました。共生社会にはみんな一緒だよ、では切り捨てられない複雑さがあると思います。

大谷さん：私は重度障害児のためのイベントボランティアに参加した経験があります。その時に、意思疎通の難しい子供に対してどう接すれば良いか、保護者の方々に対しての発言が失礼にあたらないか、初対面の方と会うからではない、いつもと違う緊張感をもっていました。無意識に、差別することへの不安があったのです。

そこで分け隔てなく接したいと思いながらも、区別していることを自覚しました。

桐原さん、大谷さん：今回のイベントを企画した背景は私たちが経験したこのような区別しないもやもや（皆一緒にしてしまう）と区別するもやもや（分け隔てなく接したい）について皆さんと一緒に考えていきたいと思ったからです。また、「マイノリティ」と「マジョリティ」と言うふうに鉤括弧をつけてタイトルをつけた理由は、それぞれの言葉の曖昧さと難しさを踏まえて皆さんに共生社会を考えて欲しいという思いからです。

今回イベントに参加してそれぞれの立場から考える共生社会と、それに付随するそれぞれの課題があることを感じ取っていただけたと思うので、ぜひご自身でも今後、この課題について考えていただきたいです。

「マイノリティ」「マジョリティ」「ダイバーシティ」「共生社会」—様々な言葉が飛び交うこの日本社会で、これらについて改めてどう深く考え、自分なりに何を大事にしていき、どこを目指して行動すべきなのか。それを問われたイベントでした。

より明るい多様な未来のために、読者の皆さんもぜひじっくり考え、行動にうつしてみてください。